

ランチョンセミナー

■ 2026年10月18日(日) 11:50～12:50 | Ⅲ 第6会場

[LS2-6] ランチョンセミナー 2-6 「薬剤師に求められる皮膚外用剤の特性理解と患者貢献」

座長:杉浦 伸哉(株式会社スギ薬局 代表取締役副社長)

共催:マルホ株式会社

[LS2-6-1] 外用剤の研究者が伝える基剤と外用指導の重要性について～保湿剤を中心に～

芦塚 勇樹 (マルホ株式会社 ヒルドイドビジネスユニット サイエンスグループ)

[LS2-6-2] 保湿剤使用の科学的根拠と選定療養

大井 一弥 (鈴鹿医療科学大学 副学長・薬学部長 社会連携研究センター センター長)

ランチョンセミナー

2026年10月18日(日) 11:50 ~ 12:50 | 第6会場

[LS2-6] ランチョンセミナー 2-6 「薬剤師に求められる皮膚外用剤の特性理解と患者貢献」

座長: 杉浦 伸哉(株式会社スギ薬局 代表取締役副社長)

共催: マルホ株式会社

[LS2-6-1] 外用剤の研究者が伝える基剤と外用指導の重要性について～保湿剤を中心に～

芦塚 勇樹 (マルホ株式会社 ヒルドイドビジネスユニット サイエンスグループ)

薬剤師が外用剤の調剤や服薬指導に役立つエビデンスを皮膚科学領域のスペシャリティーファーマに所属する外用剤の専門家が解説する。

皮膚疾患治療において、病変局所を標的とした外用剤による外用療法は基本である。皮膚外用剤は、薬の効果を発揮する有効成分に加え、基剤も重要な役割を果たしており、例えば基剤の皮膚保護作用や皮膚貯留性、使用感など、基剤を含めた総合的な作用効果が期待される。皮膚外用剤を構成する要素の大部分を占めるのは基剤であり、基剤が外用剤の性質を決めると言っても過言ではない。また、実臨床においては皮膚の状態により基剤を選択することに加え、患者さん自身が塗り続けられる使用感の基剤を選択することも治療において重要となる。

外用アドヒアランス向上のために、2種類以上の外用剤が混合されるケースも多いが、外用剤単剤においても、基剤の原料となる添加剤の選び方や製造方法によって、出来上がった外用剤の品質や性質が変わる場合があることも理解しておく必要がある。そこで、薬剤師として知っておきたい添加剤や製造方法の変更時の影響、基剤が持つ特性、当社の配合変化データなどについて紹介する。

また、外用療法の塗布量に関しては、FTU (Finger-tip unit) の概念が知られており、適正量を塗布することで期待される効果が発揮されるが、実際には、説明が不十分であると適正量を下回る塗布しかできておらず、適切な治療効果を引き出せていないことが報告されている。そのため、外用塗布指導のポイントと適正塗布に貢献できる定量吐出可能な容器の有用性についても紹介する。

ランチョンセミナー

2026年10月18日(日) 11:50 ~ 12:50 | 第6会場

[LS2-6] ランチョンセミナー 2-6 「薬剤師に求められる皮膚外用剤の特性理解と患者貢献」

座長: 杉浦 伸哉(株式会社スギ薬局 代表取締役副社長)

共催: マルホ株式会社

[LS2-6-2] 保湿剤使用の科学的根拠と選定療養

大井 一弥 (鈴鹿医療科学大学 副学長・薬学部長 社会連携研究センター センター長)



皮膚は、人体を覆う袋のような存在で、その面積は約 16m^2 である。

皮膚は、常に外界にさらし続けているため、細菌やウイルス、紫外線の刺激によって障害を受けやすいが、修復する能力に長けている。また外界からの異物を、容易に排除出来る精巧な免疫機能も併せ持っている。一般的に皮膚表面の皮脂は、加齢に伴い減少していくので、老化と共に保湿ケアが非常に重要である。しかし皮膚表面は乾燥しても、生体内から分泌される粘液や酵素は決して干からびることはない。このように生体の営みに問題が生じないのは、皮膚生理機能が正常に維持されているからである。皮膚は、生体内に急性や慢性炎症が生じ、悪化するとドライスキンになりやすいことについて我々は、基礎研究で明らかにしてきた。しかし干物にならないためには、皮膚バリアが正常に機能することと共に保湿剤によるスキンケアが重要である。保湿剤は、一般生活者や患者が使用しやすいために、剤形が豊富にある。特にヘパリン類似物質は、1954年に発売（1990年に皮脂欠乏症の効能追加）された歴史ある製剤であり、現在まで数多くの剤形がラインナップされている。ヘパリン類似物質を塗布する際には、塗布援助を行う医療者などの手荒れや塗布に要する時間と塗布しやすい剤形を考慮すべきである。

このように皮膚バリア機能を維持するには、角質細胞間で脂質と水分の層構造を形成し、天然保湿因子を蓄えて水分を保持できる保湿機能を有することが重要である。水分保持以外にも、免疫機能を担うランゲルハンス細胞、紫外線から深部組織を守るためのメラニン細胞も重要な役割を担っている。皮膚の最外層は角層であり、分泌腺が発達しており、常に脂性の分泌液や汗によって、ドライスキンが生じないように皮膚機能を保持している。高齢者は、表皮の分化や増殖も遅くなり、角層中の水分と結合する天然保湿因子も減少するため角層水分量が低下し、ほとんどがドライスキンを呈するようになる。これを放置すると、かゆみを訴えたり無意識に引っ掻いたりすることによって、皮膚炎などの病態皮膚を発現してしまう可能性がある。

我々は、これまで研究で明らかにしてきた皮膚生理機能の破綻要因と保湿剤の重要性に関する知見を紹介すると共に選定療養制度についても言及することとする。

【略歴】

1986年4月 三重大学医学部小児科研究助手
 2005年4月 城西大学薬学部病院薬剤学講座助教授
 2008年4月 鈴鹿医療科学大学薬学部 臨床薬理学研究室教授
 2020年4月 同薬学部長
 2026年4月 同副学長/薬学部長/社会連携研究センター長 現在に至る